

清原宣賢と清原枝賢の字音点の相違について

—『論語』『中庸章句』を資料として—

坂水 貴 司

(受理日二〇一五年十月五日)

一、本稿の目的

室町時代の日本漢字音を対象とする研究のうち、訓点資料を活用した研究は現在ほとんど行われていない。室町時代には、キリシタン資料、中国資料、朝鮮資料などのほか、抄物や狂言台本などの口語資料が豊富に残存するため、音韻史の資料としてはこれらが優先されるためであろう。

しかし、日本漢字音研究は平安鎌倉時代の訓点資料を活用して行われてきた。学問的位相にある訓点資料により知られてきた日本漢字音史と、室町時代の口語資料により知られてきた日本語音韻史を、直線的につなげることはできない。そのため室町時代においても、訓点資料を活用した日本漢字音研究が必要と考える。このような考えのもと、本稿の筆者は現在、室町時代に生きた博士家の学者である清原宣賢(一四七五―一五五〇)の遺文を対象として、日本漢字音の分析を行っている。

宣賢の遺文の全体像を言語変化の中に位置づけるためには、訓点資料のよきな学問の対象となる資料において、宣賢以後にどのような変化が起こっているか確認する必要があると考える。その手がかりを得るためには、清原枝賢(一五二〇―一五九〇)の遺文との比較を行うことが有効であろう。枝賢は宣賢より四五歳年下であり、宣賢の孫にあたる。

本稿では、清原宣賢の訓点資料と清原枝賢の訓点資料における字音点を比較し、その相違を記述することを目的とする。

二、対象資料と研究の方法

1. 対象資料

(1) 宣賢点

宣賢加标点として、次の二本を選択する。

① 京都大学附属図書館清家文庫蔵『論語』(1-66口8貴、以下『宣論』) 清原枝賢写・宣賢加标点の文献である。割注の存しない無注本である。前半部分が欠けており、「先進第十一」から始まる。本資料には墨仮名と朱ヲコト点(明経点)が加点されており、両者は相補い合っている。朱の仮名もあり、墨仮名の表記と実際の発音とがずれる場合に、より表音的な表記をしている(八行転呼音・促音など)。テキストは京都大学附属図書館公開の電子画像に依る。

本資料には、次のような識語がある。

子孫為_レ可_レ惑_二文字讀清濁_一一字不闕點之同指_レ聲者也_レ清三位入道宗尤(花押) / 置字大略不讀_二當_レ讀_レ之置字_一一點之【卷頭遊紙3ウ】

世俗文字讀云_二訓點_二云_二字聲_一悉失_二師說_一後葉以_二此點并字聲_一 / 可_レ為_レ證為_レ易_レ讀不依_二假名使_一点_二之為使_二幼童易_レ解_一一術也 / 侍從三位入道清原朝臣(花押)【45ウ】

識語には「入道」という語や、宣賢の法名「宗尤」が確認される。宣賢の出家は享祿二(一二五二)年であるため、享祿二年(宣賢五五歳⁽¹⁾)以降の加点であることがわかる。

②京都大学附属図書館清家文庫蔵『中庸章句』(1-66チ4貴、以下『宣中』) 清原枝賢写・宣賢加点の文献である。これも無注本で、割注はない。この資料は完本である。本資料にも、墨仮名・朱ヲコト点(明経点)・朱仮名が存する。それぞれの訓点の機能は①の『宣論』と等しい。テキストは京都大学附属図書館公開の電子画像に依る。

本資料には、次のような識語がある。

僧俗學徒・關東學士・十三經訓點・清濁・悉背先儒之說・且失師家之傳・悲哉・予憐子孫赴邪路・一字不闕點之・亦／清濁字聲指之・為令讀易・不依假名使・是亦一之術也。可／深秘而已。侍從三位清原朝臣(花押)〈俗名宣賢法名宗尤／号環翠軒〉【28ウ】

この資料も、識語より宣賢出家後に加点された資料であることが知られる。

(2) 枝賢点

枝賢加点本としては、次の三本を選択する。

①龍谷大学図書館蔵『論語集解』(021-21-2、以下『枝論』A)

清原枝賢写・点の資料で、割注の存しない無注本である。上冊と下冊の二冊に分かれる完本である。墨仮名・墨声点が用いられていて、訓読には仮名点のみが使用される。次のような識語が存する。

加家本秘点勿令外見矣／清原朝臣(花押)【上冊後表紙裏】

加家本秘点勿令外見矣／大外記清原朝臣(花押)【下冊50ウ】

枝賢が大外記の位に就いたのは天文四(一五三五)年であるため、天文年間の加点であると考えられる。テキストは、龍谷大学図書館公開の電子画像および原本調査に依る。

②龍谷大学図書館蔵『論語集解』(021-19-4、以下『枝論』B)

正平版の無跋本に、枝賢が加点した文献である。この文献は有注本で、割注を有している。前半部の一部を欠いており、「公治長第五」から始まる。墨仮名・朱ヲコト点(明経点)が存する。

應下間筑後法橋威命拭澁眼／染禿筆以累家秘本加朱墨点勿／令外見而已

／元龜第三歳舍壬申孟秋二十又八／宮内卿清原朝臣(花押)【卷末遊紙1オ】
奥書より、元龜三(一五七二)年点であることが知られる。加点時、枝賢は五三歳である。テキストは、龍谷大学図書館公開の電子画像および原本調査に依る。

③京都大学附属図書館清家文庫蔵『中庸章句』(1-66チ1貴、以下『枝中』)

有注本で、訓読には仮名点のみを使用している。識語は次の通りである。

右中庸者儒術之徳業聖門之／奥室也喜怒哀樂仁義礼知之要／也于爰祐圓律師日々月々習而誦／讀之嗚呼助於我乎／天正元年冬十又二月中旬／宮内卿清原朝臣(花押)【卷末遊紙1オ】

識語には、天正元(一五七三)年の年号があり、そのころの書写であることが知られる。加点時、枝賢は五四歳である。テキストは京都大学附属図書館公開の電子画像に依る。

2. 方法

本稿では、それぞれの資料を体系的に比較する。このことで、対応箇所と比較のみでは集めることのできない用例を収集することができる。この比較により知られた相違を、音韻論的・語彙論的・表記史論的な観点から整理し、記述する。

三、研究結果

以下、比較により明らかになった相違を整理する。

1. 音変化に関する字音点の相違について

(1) ジ・ヂの合流

宣賢写本では、ジ・ヂが混同して表記されることがない⁽²⁾。例えば、宣賢写本の「持」字の音は「ヂ」で表記されている。

危アヤクキチを持チシテ(宣中18オ7)

一方、枝賢写本には次のように、「ヂ」表記が期待される箇所「シ」「ジ」で表記される例が見られる。

屏シは除シ(なり)(枝論B④29オ1b)

持ジシテ載セセルコト無ク(枝中47ウ1)

中世末期には、口語においてジ・ヂが合流していた⁽³⁾。この例から、元龜年間・天正年間には口語で既に発生していたジ・ヂの合流が、学問の対象である訓点資料にも波及していたことが確認される。

(2) アウ連母音の音変化

アウ連母音は、『日葡辞書』(一六〇三年刊行)に次のような形で表れる⁽⁴⁾。

アウ由来…Vozo (奥蔵)・Vomu (鸚鵡) ≡ ワウ相当
 ワウ由来…Vōto (王道)・Vōfen (往返) ≡ ワウ相当

このように『日葡辞書』の段階では、アウ由来の連母音とワウ由来の連母音は合流し、ワウ相当の連母音へと変化している。室町時代において、アウ連母音の音価は「o」に変化していた⁽⁵⁾。これを才段の音と把握するようにになると、当時のオに必須であった半母音が添加される。半母音の添加が行われると、アウ由来のものもワウ由来のものも音価が等しくなるので、合流することになる。

本稿で対象とした資料ではアウ由来の連母音の字として、「奥」字が出現する。これは、次のように表れる。

- ① 宣賢写本
 綱奥(宣中4才1)
- ② 枝賢写本
 綱奥(枝中4才4)
 奥ニ(枝論A①9ウ3)

宣賢写本では仮名で「アウ」と表記されているのに対し、枝賢写本では「ワウ」と表記されている。そのため枝賢写本の段階では、ワ行相当のものとして把握されていることが知られる⁽⁶⁾。『枝論』Aでは、識語に「加家本秘点」と存するものの、宣賢点とは異なった加点があることに注目される。

大永三(一五二二)年に成立した中国資料『日本国考略』には、「アウ」に対して「三」介音を有する「黄」字が充てられているという⁽⁷⁾。また日本漢字音で「ワウ」相当の「王」字も同様に「黄」字で注されていることから、口語において半母音を添加した形で発音されていたことが知られる。枝賢の生年(一五二〇年)を考慮すると、枝賢は言語形成期に、「アウ」も「ワウ」もともに、「ワウ」相当に合流したものと習得したと考えられる⁽⁸⁾。枝賢写本においては、高度な学習に基づいた漢籍の訓点資料であっても、「ワウ」のような加点が許容されていることが重要であると考える。

2. 語形の相違について

日本漢字音で漢音・呉音の両方が存する字であっても、時代が降るにつれて、一方が頻用されるために、もう一方が特定の語で使いにくくなったり、消滅したりすることがある。漢籍訓読資料では原則として漢音読がなされる。

しかし、先述の理由により漢音が使いにくくなっている場合には、呉音形が選択される場合がある。

以下には、宣賢写本と枝賢写本で漢音・呉音の選択が異なり、語形が相違するものを挙げた。

表1 動

宣賢	漢音 動 <small>トウ</small> 静 <small>セイ</small> (宣中2ウ1)	呉音 動静(枝中2ウ3)
枝賢		

表1の「動」字は、枝賢写本において漢音が使いにくくなり、呉音形が選択されている例として挙げられる。①の「動」字は、宣賢写本でも清注記が付されていることから、日常的には濁音と把握されていたと考えられる⁽⁹⁾。

表2 祭

宣賢	漢音 大 <small>ダイ</small> 祭 <small>サイ</small> (宣論6ウ2) 祭(宣論44才6)	呉音 大祭(枝論B②32才6) 祭スルトキは(枝論B②17才3) 祭祀(枝論B②29ウ3b)
枝賢	大祭(枝論A②7才6) 祭(枝論A②48ウ8)	

表2の「祭」字も枝賢写本において漢音形が使いにくくなったものである。枝賢写本では『枝論』Aに呉音形「サイ」がなく、『枝論』Bにのみ見られる。枝賢の加点にも、漢音形・呉音形の選択に年代差がある可能性がある。

表3 幼

宣賢	漢音 長 <small>チヤウ</small> 幼 <small>ユウ</small> (宣論38才6)	呉音 幼 <small>ユウ</small> にして(宣論22才3)
枝賢	長幼(枝論A②24ウ3) 幼ニシテ(枝論A②42才5) 長幼ニシテ(枝論B③25才6) 長幼(枝論B④15ウ4)	

表3の「幼」字は、京都大学人文科学研究所松本文庫蔵『大慈恩寺三蔵法師伝』鎌倉初期点や⁽¹⁰⁾、久遠寺蔵『本朝文粹』鎌倉中期点などの漢音資料でも「エウ」の加点が確認出来る⁽¹¹⁾。また、静嘉堂文庫蔵清原宣賢点『毛詩鄭箋』に、「噲噲其正噦噦其冥」の割注として、「冥は幼(なり)一也」。(巻第十八、163)という例が存する⁽¹²⁾。この本は宣賢加点本の中でも、移点によって特に古い語形・表記が出現する本である。これらから、古くから「幼」字に対しては漢音資料の中でも、「イウ」「エウ」(およびそれぞれの融合形「ユウ」「ヨウ」)が並存していたものと考えられる。このように、古くから漢音資料で揺れているものについては、宣賢写本で呉音形が出現して、枝賢写本で出現しない場合があるようである。

表4 筭

	漢音	呉音
宣賢 斗筭(宣論14ウ5)		
枝賢 斗筭(枝論A②16才8)		斗筭(枝論B③8ウ1)

表4の「筭」字は、諧声符による類推が働いている可能性がある。「筭」字は諧声符に「肖」(漢音「セウ」)を持つ。諧声符による類推により実現した語形が、結果的に呉音形と一致したのである。

3. 才段拗長音表記の相違

表記についても、宣賢写本と枝賢写本は異なっている。才段拗長音の表記は特に両写本の表記に違いが大きい⁽¹³⁾。

以下、両資料の才段拗長音表記を、五十音図の行ごとに挙げる⁽¹⁴⁾。

表5 ㊦ヨウ由来

ヤ行	宣賢	雍 ヨウ【宣論】6ウ3	㊦ウ表記
		容 ヨウ【宣論】1ウ2、【宣中】1才1、1才2、6才1、6才2、6才3、7ウ5、7ウ5、7ウ6、7ウ6、8才2、9才3、9才5、9ウ2、	(用例無し)

	ガ行		
	宣賢	ガ行	
枝賢	宣賢	枝賢	枝賢
1ウ2 恭クキヨウ ⁽¹⁵⁾ ウ7	恭キヨウ【宣論】14才5、29ウ7、32ウ3、32ウ4、43才4、【宣中】27ウ5、28才4 拱キヨウ【宣論】38才3 矜キヨウ【宣論】34才7、41	(用例無し) (用例無し)	(用例無し) (用例無し)
④3ウ1、④26才2	恭ケウ【枝論B】①6才5、①31才1、①31ウ1、③7ウ3、		

清原宣賢と清原枝賢の字音点の相違について

— 『論語』『中庸章句』を資料として—

タ行	ダ行	ナ行	ラ行	サ行	ザ行
宣賢 (用例無し)	枝賢 (用例無し)	宣賢 (用例無し)	枝賢 (用例無し)	宣賢 (用例無し)	枝賢 (用例無し)
重テウ【宣中】24才7	冢テウ【宣論】21ウ5	(用例無し)	龍レウ【宣中】22ウ4 陵レウ【宣論】43才1 陵レウ【枝論A】②47才7	從シヨウ【宣中】19才4、【宣論】2才2、22ウ5 誦シヨウ【宣論】12才5 鐘シヨウ【宣論】33ウ7 稱シヨウ【宣論】14ウ2、14ウ2、20ウ2、24ウ7、30才5、30才6、30ウ6、30ウ7、30ウ7、31才1、31才1、35ウ7 乘シヨウ【清】【宣論】4ウ5 從シヨウ【枝論A】①7才5、②2才5、②25才7、【枝論B】③17才1b、③27才6 訟シヨウ【枝論B】①10才2a 誦シヨウ【枝論A】②13ウ4 種シヨウ【枝論B】②6ウ2b 稱シヨウ【枝論A】②16才4、③36ウ5、【枝論B】③44ウ3	興キヨウ【枝論B】①31ウ5a (用例無し)
			③44ウ4、④10才6 稱セウ【枝論B】①31才4、③21ウ4、③32才1、③43ウ3、	頌セウ【枝論A】①35才7 乘セウ【枝論A】②5才5	共ケウ【枝論B】②18ウ6 矜ケウ【枝論A】②46才4、【枝論B】①33才2a、④7ウ1 拱ケウ【枝論B】④15才5 (用例無し)

ガ行	ヤ行
宣賢	宣賢
堯ギヨウ【宣論】22才2、43ウ4、43ウ5、【宣中】1才5、1才7、3才3、3才7、25才6 キヨウ【宣中】1ウ1、2ウ2	①ヨウ表記 妖ヨウ【宣中】21才2 要ヨウ【宣論】17ウ2、18才2、【宣中】5才4、7才7、7ウ3、28才6 陶ヨウ【宣論】10ウ2、【宣中】2ウ7 妖ヨウ【枝中】39才4 夭ヨウ【枝論A】①25才4、【枝論B】①21ウ3、①37才5b 要ヨウ【枝論B】③15才5、16才6b 陶ヨウ【枝論A】②11ウ6、【枝論B】①37才3b、【枝中】④17ウ1a
徽ゲウ【宣中】12ウ4	②ウ表記 (用例無し)
堯ケウ【枝論A】①32才4、【枝論B】④27才1	

表6 ㊦ウ由来

ハ行	バ行	マ行
宣賢	宣賢	宣賢
憑ヒヨウ【枝論A】①25ウ7、【枝論B】①23才5	(用例無し)	冢チヨウ【枝論A】②24才5 (用例無し)
(用例無し)	(用例無し)	(用例無し)
(用例無し)	(用例無し)	(用例無し)
(用例無し)	(用例無し)	(用例無し)

カ行	宣賢	サ行	宣賢	ザ行	宣賢	
驕ケウ【宣論】29才2	驕ケウ【宣中】10才1、10才1、10才2、10才3	韶シヨウ【宣論】24才3	韶シヨウ【宣中】2ウ7	(用例無し)	(用例無し)	
嬌ケウ【枝論B】③41才6	嬌ケウ【枝論B】②1ウ6b	擾セウ【宣論】32才6	擾セウ【枝論A】②35ウ4【枝論B】④2ウ5	擾セウ【宣論】32才6	擾セウ【枝論A】②35ウ4【枝論B】④2ウ5	
僑ケウ【枝論B】①6才4b	僑ケウ【枝論B】①6才4b	小セウ【宣論】3才4、5才5、6才2、9才1、9ウ1、11才3、12才1、14才1、14才1、14ウ3、15才3、15ウ1、15ウ3、16ウ5、19ウ2、22ウ6、24ウ3、24ウ7、25ウ1、26才4、26才5、26才5、29ウ2、30ウ7、31才1、32才4、33ウ2、34才1、34ウ4、35ウ6、36才4、40才4、40ウ2、40ウ7、41才1、43ウ7、45才1、【宣中】7ウ5、7ウ6、7ウ6、10ウ7、12ウ3、25ウ2、27才2	肖セウ【宣中】8才6、10ウ5	昭セウ【宣中】15才7、22才5	少セウ【宣論】38ウ3、38ウ5、39才2	
召セウ【宣論】18才4、33ウ5、33ウ5	召セウ【宣論】18才4、33ウ5	蕭セウ【宣論】28才5	蕭セウ【枝論A】②6ウ3	小セウ【宣論】3才4、5才5、6才2、9才1、9ウ1、11才3、12才1、14才1、14才1、14ウ3、15才3、15ウ1、15ウ3、16ウ5、19ウ2、22ウ6、24ウ3、24ウ7、25ウ1、26才4、26才5、26才5、29ウ2、30ウ7、31才1、32才4、33ウ2、34才1、34ウ4、35ウ6、36才4、40才4、40ウ2、40ウ7、41才1、43ウ7、45才1、【宣中】7ウ5、7ウ6、7ウ6、10ウ7、12ウ3、25ウ2、27才2	小セウ【枝論A】②6ウ3	小セウ【枝論A】②6ウ3

ラ行	宣賢	ナ行	宣賢	タ行	宣賢
寮レウ【宣論】20ウ6、20ウ7、21才2	寮レウ【宣論】20ウ6、20ウ7、21才2	(用例無し)	(用例無し)	(用例無し)	(用例無し)
繚レウ【宣論】39才1	繚レウ【宣論】39才1	(用例無し)	(用例無し)	(用例無し)	(用例無し)
繚レウ【枝論A】②43才1、【枝論B】④17才4、④17才5b	繚レウ【枝論A】②43才1、【枝論B】④17才4、④17才5b	(用例無し)	(用例無し)	(用例無し)	(用例無し)
蕭セウ【枝論B】③39才5	蕭セウ【枝論B】③39才5	(用例無し)	(用例無し)	(用例無し)	(用例無し)
召セウ【枝中】3才2	召セウ【枝中】3才2	(用例無し)	(用例無し)	(用例無し)	(用例無し)
肖セウ【枝論A】①7才8	肖セウ【枝論A】①7才8	(用例無し)	(用例無し)	(用例無し)	(用例無し)
笑セウ【枝論B】②29才1b	笑セウ【枝論B】②29才1b	(用例無し)	(用例無し)	(用例無し)	(用例無し)
小セウ【枝論A】②6ウ3	小セウ【枝論A】②6ウ3	(用例無し)	(用例無し)	(用例無し)	(用例無し)
蕭セウ【宣論】28才5	蕭セウ【宣論】28才5	(用例無し)	(用例無し)	(用例無し)	(用例無し)
5、33ウ5	5、33ウ5	(用例無し)	(用例無し)	(用例無し)	(用例無し)
召セウ【宣論】18才4、33ウ5	召セウ【宣論】18才4、33ウ5	(用例無し)	(用例無し)	(用例無し)	(用例無し)
5、39才2	5、39才2	(用例無し)	(用例無し)	(用例無し)	(用例無し)
少セウ【宣論】38ウ3、38ウ5	少セウ【宣論】38ウ3、38ウ5	(用例無し)	(用例無し)	(用例無し)	(用例無し)
鳥テウ【宣論】33ウ4、37ウ5	鳥テウ【宣論】33ウ4、37ウ5	(用例無し)	(用例無し)	(用例無し)	(用例無し)
趙テウ【宣論】17才5	趙テウ【宣論】17才5	(用例無し)	(用例無し)	(用例無し)	(用例無し)
朝テウ【宣論】10才3、13才3、19才3、21才1、37才1、42才4、42ウ1、【宣中】18才3	朝テウ【宣論】10才3、13才3、19才3、21才1、37才1、42才4、42ウ1、【宣中】18才3	(用例無し)	(用例無し)	(用例無し)	(用例無し)
朝テウ【枝論B】③5才5、③5才6a、③16ウ2a、③19才2、④12才6	朝テウ【枝論B】③5才5、③5才6a、③16ウ2a、③19才2、④12才6	(用例無し)	(用例無し)	(用例無し)	(用例無し)
趙テウ【枝論A】②19才5	趙テウ【枝論A】②19才5	(用例無し)	(用例無し)	(用例無し)	(用例無し)
彫テウ【枝論B】①2才5	彫テウ【枝論B】①2才5	(用例無し)	(用例無し)	(用例無し)	(用例無し)
釣テウ【枝論A】①27ウ7、【枝論B】①27ウ7	釣テウ【枝論A】①27ウ7、【枝論B】①27ウ7	(用例無し)	(用例無し)	(用例無し)	(用例無し)

マ行	宣賢	枝賢	マ行	宣賢	枝賢
	(用例無し)	(用例無し)		(用例無し)	(用例無し)
弔テウ	【枝論B】②14ウ3				
廟ベウ	【宣論】5オ4、6オ1、19オ1、42ウ5、【宣中】13ウ6、14ウ3、15オ6、15オ7、15ウ5				
妙ベウ	【宣中】1ウ6、28オ5				
	(用例無し)				
ハ行	宣賢	枝賢	ハ行	宣賢	枝賢
	(用例無し)	(用例無し)		(用例無し)	(用例無し)
瓢	へウ	【枝論A】①22オ3、【枝論B】①14オ3、①14オ3b			

用例数をまとめると、次の通り(表7、表8)。

表7 ㊦ヨウ由来

表記	ハ行	バ行	マ行	タ行	ダ行	ナ行	ラ行	サ行	ザ行	カ行	ガ行	ヤ行
㊦ヨウ	0	0	0	0	0	0	0	18	0	0	0	34
㊦ウ	0	0	0	2	0	0	2	9	0	11	0	17

表8 ㊦ウ由来

表記	ハ行	バ行	マ行	タ行	ダ行	ナ行	ラ行	サ行	ザ行	カ行	ガ行	ヤ行
㊦ヨウ	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	10	9
㊦ウ	3	0	0	11	0	0	4	55	1	5	1	0

両資料の表記法について次のような共通点がある(表7、表8の太枠部分)。

- ・ヤ行については、エウ由来、ヨウ由来ともに、全例「ヨウ」系統の加点がある。
 - ・ラ行について用例が少ないものの、「リヨウ」表記は存しない。
 - ・ガ行について、「㊦ウ→㊦ヨウ」の表記が宣賢・枝賢写本ともに出現する(ただし、「㊦ヨウ」表記は「堯」字のみ)。
- 一方、次のような相違点がある(表7、表8の破線枠部分)。

- ・㊦ヨウ由来のカ行の例で、「ケウ」表記が出現するのは枝賢写本のみ。
- ・㊦ヨウ由来のサ行の例で、「セウ」表記が出現するのは枝賢写本のみ。
- ・㊦ヨウ由来のタ行の例では、用例が少ないものの、「テウ」表記が出現するのは宣賢写本のみ。

・㊦ウ由来のサ行の例で、「シヨウ」表記が出現するのは宣賢写本のみ。このように、両資料の表記には共通する部分もある。しかし特に、カ行・サ行については宣賢写本と枝賢写本との差が大きい。カ行・サ行のオ段拗長音表記は、宣賢写本「㊦ヨウ」、枝賢写本「㊦ウ」という表記の偏りがあると考えられる。ただし、タ行のように宣賢写本でのみ「㊦ウ」が出現する場合もある。

院政鎌倉時代から室町中期に至るまでのオ段拗長音表記は、ヤ行は「ヨウ」のみで表記され、その他の行では「㊦ウ」で表記されるといふ原則が指摘されている⁽¹⁶⁾。枝賢の写本はこのような傾向に合致すると考えられる。一方、宣賢の写本はこの表記傾向に一致しない部分があることも、この比較により知られる。

子音により遅速があるものの、以上のものが音変化を反映した表記の違いであるならば、㊦ウ表記から㊦ヨウ表記に移行すると考えられる⁽¹⁷⁾。そのため、両者のこの差は、個人差と考えるべきであろう。

四、むすび

本稿では、清原宣賢の写本と清原枝賢の写本を比較し、その字音点の相違を記述した。その結果、次のような相違が指摘できた。

- ①清原宣賢加本では見られない、ジ・ヂの合流およびアウ連母音のワ行化が、清原枝賢の写本で確認された。
- ②清原宣賢写本では漢音形が選択されていた語でも、清原枝賢写本では呉音形が選択される場合がある。これは、日常で呉音形の方が頻用されたため、と考えられる。ただし、古くから漢音資料の中で揺れていたものは、宣賢写本でも呉音形が出現する。
- ③宣賢の写本と枝賢の写本では、オ段拗長音表記について異なりがある。特に、カ行・サ行では、宣賢写本「㊦ヨウ」、枝賢写本「㊦ウ」という表記の傾向があると考えられる。

本稿の調査結果は、宣賢と枝賢の間に生じた言語変化の影響と考えられる。しかし、宣賢と枝賢の比較のみであるために、宣賢と枝賢の個人差である可能性も否定できない。特に③の表記面については、個人差であると考えた。今後さらに例を集めて考えたい。

【注】

- (1) 年齢は数え年で示す。以下同じ。
 (2) ここでは単に「ジ・ヂ」と表記していても、ジャ・ジュ・ジョとチャ・ヂュ・ヂョとの合流も含む。
 (3) 一六〇四—一六〇八年刊のロドリゲス『日本大文典』に京都でもジ・ヂが合流していたという指摘がある。土井忠生訳『日本大文典』(一九五五年、三省堂。一九六七年の第三版に依った) 六〇八頁。
 (4) 用例は、オックスフォード大学ボールドレイアン図書館蔵本(『キリシタン版日葡辞書カラー影印版』二〇一三年、勉誠出版)に依る。また漢字は、土井忠生他『邦訳日葡辞書』(一九八〇年、岩波書店)に依る。
 (5) 推定音価は、豊島正之「開合」に就て(『国語学』一三六集一九八四年三月、国語学会) 一四五頁に依った。
 (6) なお、吉田兼右(一五一六—一五七三)写とされる、天理大学附属天理図書館蔵『論語集解』(123・3―イ15)には「奥^{アウ}ニ(10オ6)」と現れる。兼右は宣賢の息子であり、枝賢よりも四年先に生まれている。年齢から考えれば枝賢と同世代であるものの表記が「アウ」と出現するのは、前代の表記を引き継いだためであろうか。
 (7) 『日本国考略』の成立年代は大友信一『室町時代の国語音声の研究』(一九六三年、至文堂) 一〇六頁。また用例と推定音価(一九世紀寧波方言)は、馬之壽「中国資料に見られる才段長音の開合の音価と統合」(『論集』X二〇一五年二月、アクセント史資料研究会) 六七頁に依る。
 (8) 一方、宣賢言語形成期の室町中期に書写されたとされる、成實堂本『論語抄』には「奥」字に対して「アウ」の加点がある(第一冊27オ1)。『論語抄』(一九一七年、民友社)に依る。
 (9) 来田隆「抄物に於ける「清」^{スム}「濁」^{ニゴル}」注記について(『国語学』第八四号 一九七一年三月、国語学会) 五四頁。

- (10) 京都大学人文科学研究所公開の電子画像に依る。
 (11) 『身延山久遠寺蔵重要文化財本朝文粹』(一九八〇年、汲古書院)に依る。
 (12) テキストは『古典研究會叢書漢籍之部2毛詩鄭箋(二)』(一九九三年、汲古書院)に依った。
 (13) ここて言う才段拗長音とは、元来「㊦ヨウ」「㊧ウ」と表記されていたものの総体を指す。実際の音価が拗長音となっていない可能性は十分にある。
 (14) 清濁対立のある行での判定については、濁点が付されている字に加え、漢音の祖体系において明母「ㄇ」・微母「ㄆ」・泥母「ㄋ」・娘母「ㄌ」・疑母「ㄐ」・日母「ㄑ」の頭子音を持つ字を濁音と判定した。これらの子音は、漢音において濁音での受容を原則としている。推定音価は平山久雄「中古漢語の音韻」(『中国文化叢書1言語』第五版一九八一年、大修館書店、初版一九六七年)に依る。
 (15) 枝賢点に「クキヨウ」のような、イ列合拗音表記が出現するのは、先行する訓点資料の表記を引き継いだためであろう。よって本稿では「キヨウ」表記と同じものと見なす。
 (16) 出雲朝子「成實堂本論語抄における才段拗長音の表記について」(『未定稿』第九号一九六一年九月、未定稿同人会) 一一四頁。
 (17) 竹村明日香「ローマ字本キリシタン資料の才段合拗長音表記——抄物の表記との対照を通して——」(『語文』第九六号二〇一一年六月、大阪大学国語国文学会) 六七頁。

「付記」本稿を成すにあたり、龍谷大学図書館・天理大学附属天理図書館の関係各位には、原本閲覧に際して格別のご高配を賜りました。誠にありがとうございました。記して御礼申し上げます。

(主任指導教員 佐々木勇)

The Difference between Diacritical Marks for Sino-Japanese Used by
Kiyohara Nobukata (清原宣賢) and Kiyohara Shigekata (清原枝賢)
: the *Rongo* (論語) and the *Chuyo-Shoku* (中庸章句)

Sakamizu Takashi

Abstract: The purpose of this paper is to consider (1) the difference between diacritical marks for Sino-Japanese used by Kiyohara Nobukata (清原宣賢, 1475-1550) and Kiyohara Shigekata (清原枝賢, 1520-1590), and (2) sound changes in diacritical materials (訓点資料). For this purpose I will deal with the *Rongo* (論語) and the *Chuyo-Shoku* (中庸章句). The following can be pointed out: 1) In Shigekata's manuscript /zi/ (ジ) and /di/ (ヂ) merge under /zi/ (ジ), /au/ (アウ) and /wau/ (ワウ) merge under /wau/ (ワウ); 2) In Shigekata's manuscript Go-on (呉音) is more frequently employed than in Nobukata's manuscript; 3) /-eu/ and /-jou/ are transliterated as -IYOU (イヨウ) in Nobukata's manuscript and as -EU (エウ) in Shigekata's manuscript. This indicates that language change came about between Nobukata's and Shigekata's time.

Key words: Kiyohara Nobukata, Kiyohara Shigekata, Sino-Japanese, the Muromachi period,
Diacritical Materials

キーワード: 清原宣賢, 清原枝賢, 日本漢字音, 室町時代, 訓点資料